

特集：次世代の人材を育成するために変革する教育システム

PBL科目における教員負担の少ないグループ成果予測の試み ——「しまなびプログラム」の学生理解度アンケートを用いて——

井ノ上 憲司*, 中島 洋**, 大塚 一徳**, 村上 正行*、***, 鈴木 克明****

A Trial of a Prediction Method for Group Outcomes with Least Complications in PBL Classes

—Using Students' Comprehension Questionnaire in the “Shimanabi Program”—

Kenji INOUE*, Hiroshi NAKASHIMA**, Kazunori OTSUKA**, Masayuki MURAKAMI*,***,
Katsuaki SUZUKI****

1. はじめに

2012年に公表された文部科学省中央教育審議会答申⁽¹⁾では、若者や学生の「生涯学び続け、どんな環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」を育成することが、大学教育の直面する大きな目標だとされている。この目標を達成するために、大学教育においてPBL (Project based Learning)⁽²⁾ やサービス・ラーニング⁽³⁾ などの新たな教育実践が取り組まれるようになってきている。

長崎県立大学では2015年度より全学必修の共通科目群「しまなびプログラム⁽⁴⁾」を実践しており、第1・2・3著者が運営に関わっている。この科目群は、長崎県の離島・島嶼部(以下、しま)の課題から学生自らがテーマを設定し、解決手段を考え、現地でフィールドワークを実行する一種のサービス・ラーニングである。教員主導ではなく学生自身が進められるように、当初よりPBLのプロセスを手順化した教科書とeラーニングシステム⁽⁵⁾を導入した。その後、現地のコーディネーターを設定したりなど、学生の失敗を減らすための環境作りを進めてきたが、全学必修科目であることから、議論や活動が低調なグループが少なからず発生しており、受け入れ地域との関係構築

の観点で課題となった。しかし、教員が介入しすぎてPBLの良さが失われた事例⁽⁶⁾などから、学生自身に気付かせる仕組みでの改善の必要が生じた。

一方で、近年ではラーニング・アナリティクス⁽⁷⁾に代表されるような、教育実践データを分析し対応する研究も進んでいる。アーリーアラート・中退予測(at-risk)の仕組みなどは、さまざまな分析モデルを使用した報告がなされている⁽⁸⁾。

本研究では、グループ編成に問題がないかグループワーク前に知ること、グループワーク開始後も最終的な評価が悪くなりそうなグループを予防するため「学生に気づき」を促す仕組みを構築するというを将来的な目的として、グループワークの初めや途中で最終的なグループの評価が予測可能かを検討した。本稿では、大規模なデータ解析や発話分析法など実施する教員に負担のかかる方法を用いず、各回の授業で学生が回答する選択式の「理解度アンケート」で得られたデータからグループの最終評価を予測する方法について、「しまなびプログラム」のデータを分析した結果を報告する。

2. 対象授業「しまなびプログラム」

本プログラムは、全学必修で、課題発見(テーマ)、

* 大阪大学 スチューデント・ライフサイクルサポートセンター(Center for Student Success Research and Practice, Osaka University)

** 長崎県立大学 (University of Nagasaki)

*** 大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部 (Department of Teaching and Learning Support, Osaka University)

**** 熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻 (Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University)

受付日: 2022年6月17日; 再受付日: 2022年11月6日; 採録日: 2022年12月12日